

開業医の視点からの臨床研究：マイクロ波子宮内膜焼灼術

平成10年卒 松本直樹

岡本愛光教授，田中忠夫同窓会会長，ほか諸先生方，今回の第75回日本産科婦人科学会学術講演会の主幹開催ならびに成功おめでとうございます。そして医局員をはじめ協力された先生方，スタッフの方々大変お疲れさまでした。

私は一参加者として，会期3日間を楽しませていただきました。その中で国際ポスター演題での発表もしました。タイトルは“Clinical practice and short-term efficacy of microwave endometrial ablation for the treatment of menorrhagia in an outpatient clinic”とし，自院で行ってきたマイクロ波子宮内膜焼灼術(MEA)の治療成績をまとめたものです。その要旨を示します(スライドPDFは松本産婦人科医院ウェブサイト <https://matsumotoc.org> から閲覧できます)。6年間で32例に静脈麻酔と傍頸管ブロック下でMEAを行い，その短期的な有効率(術後1年)は94%でした。出血量，月経痛のVASスコア(visual analog scale: 0~100)中央値はそれぞれ術前100から術後25へ，術前27から術後0に改善し，治療満足度のVASスコア中央値は90でした。過多月経の治療としてLNG-IUS(ミレーナ)で治療した群(82例)と比較しても，MEA群の方が子宮筋腫の割合が大幅に多かったにもかかわらず同等以上の有効率でした。長期的には過多月経が再燃してしまう症例も術後一部にみられますが，子宮全摘等を希望しない症例に対する有用な治療オプションです。

岡本先生には1998年に私が慈恵医大を卒業し初期研修医として入局したとき，本院5E婦人科A班の上席医(新美茂樹先生，岡本愛光先生，齋藤絵美先生，柳田聡先生)のひとりとして直接の指導をいただきました。当時から，英語の重要性，最新医学に意識を向ける重要性を指導してくれました。その頃は，日々の診療・当直・雑務，なにより多数の飲み会で極めて忙しく，もとよりいろいろな面で未熟で真面目に取り組むやる気も乏しかったので，それらの重要性の理解も勉学・研究の実行力もありませんでした。しかしながら，医師としての経験を積む中で少しずつ理解し(たつもりで)，そして今気づけば自分の診療と(草)臨床研究につながる大きな礎です。

近年の日産婦学術講演会では，日本人であっても英語の発表が主になってきています。実際のポスター発表会場でのディベートの様子からは，自分は論外としても，まだまだ日本人医師の英語能力は不十分と感じました。その一方で慈恵医大産婦人科教室の現教室員の方々は，海外の学会参加・発表も多く，さらにたくさんの英文論文も執筆されているようで感心するばかりです。私は一開業医としてローカルの女性のためになるよう，最新の医学知識に基づいたより良い医療を日々の臨床に落とし込めるよう努力し続けたいと思います。そして慈恵産婦人科OBとして，さらなる教室の発展を期待しています。



慈恵人と他学とそしてイクメン的考察

平成11年卒 三 沢 昭 彦

第75回日本産科婦人科学会学術講演会、開催そして大盛会おめでとうございます。それは岡本愛光教授のあふれんばかりのpassionそしてみなぎるpower、それに続く現役医局員の皆様の愛と団結力の賜物で、この大成功を誇りに思っております。皆様お疲れ様でした。

退局後に縁があり可愛がっていただいている杏林大学の同門会からお誘いいただきお邪魔していたところ、突然高野教授と野口先生が「慈心妙手」の日本酒の御裾分けにいらっしゃいました。日産婦の開催校の恒例行事とはいえ、ここまでしなければならいのかと驚くとともに、この澤乃井を慈恵人として誇らしげにおしくいただくことができました。「さすが慈恵」のHospitalityとOMOTENASHI！ 一方で、Sparklingしすぎているようにも感じ「やりすぎじゃない」などという話も耳にしました。確かに医局を離れると冷静にみることができそうという印象にも納得します。

さて私個人にとってはWEB配信こそが何よりのOMOTENASHIでした。以前より私のスタンスとして、一般病院の勤務医は少人数のためできるだけ後輩に現地参加してもらえるように調整し、上級医となった際には参加せずに居残りしていました。そして何よりも大きく変わったことと言えば、一児の父となったことで、時間があるときはできる限り子供と触れ合うよう息子中心の生活に「イクメンシフト」しました。すると現地参加は夢のまた夢であり、学会は当直や夜時間があるときなどwebで少しずつしか聞くことができないのが実際です。「現地での熱いdiscussion」そして現地での懇親会、親睦会(という名の飲み会?)など、現地開催の良さのみを取り上げ「やっぱり学会は現地開催」という風が吹き始め、それだけになってしまうことに危機感を感じました。今は政府も異次元の少子化対策なるものに取り組んでいます。ちいさな子供をもつ親も気軽に現地参加できるよう託児所のみならず、別室で子連れ専用会場の用意などすべての学会員にとって幸せになる学術集会となってほしいと思っております。

ところで学術講演会終了後の現地同窓会での若手のパワーには圧倒されました。冬の時代を経験している自分としてはこの夢のような時間がいつまで続いてくれるのか不安でなりません。今後の3年は人材育成に重点を置くと聞き嬉しくそして羨ましい一方で少し不安がよぎりました。あのpowerとpassionで迫られたら、さすがにその重圧で僕はつぶされてしまうかも。今の勢いのある医局員なら心配ご無用といったところでしょうか。小泉進次郎氏の言う「笑顔の職場」でありますように。

最後にもう一度、大盛会、おめでとうございます。そしてお疲れ様でした。





第75回
日本産科婦人科学会
学術講演会 記念誌

